

1940年代に南洋へ派遣された女性作家の役割

張 雅*

本稿は1940年代に日本から南洋の占領地へと派遣された女性作家らに注目し、派遣の時期、期間、活動などの面から、女性作家に求められた役割について解明するものである。特に、1940年代に臨時徴用作家としてフィリピンに徴用された作家のうち、三宅艶子の『比島日記』（東邦社 1944）と川上喜久子の『フィリピン回想』（川上喜久子 発行 1984）という二つのテキストを取り上げ、当時の日本社会に存在していた性別分業の考え方が軍政視察を目的とする女性作家の公的領域の体験にどのような影響を与えていたのかを考察する。この分析を通して、女性作家らが、占領地における政治間と性別間の支配的権力関係に沿う形で「女流作家」から「日本女性」へ、さらに「主婦」へと転化させられる、または自ら積極的に変わっていくなかで、常に自分の役割の再認識と個人的アイデンティティの再編成とに巻き込まれ、葛藤や抑制、反発という変化を示したことを浮かび上がらせるとともに、女性が戦争を語るときの特殊性を明らかにする。

キーワード

南洋、女性作家、戦争、役割分担

目次

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| I はじめに | 1 フィリピンに徴用された作家 |
| II 女性作家を戦地に送り込む軍部の思惑 | 2 女性作家の「洋服」と男性作家の「軍刀」 |
| 1 内地に向けての宣伝 | 3 「主婦」として、「作家」としての葛藤 |
| 2 占領地に向けての宣伝 | 4 「日本人女性」としての優位性 |
| III 女性作家の占領地南洋の体験 | V 終わりに |
| IV 個々の女性作家の自分の役割への意識 | |

I はじめに

1938年4月1日に国家総動員法が公布された後、日本では老若男女を問わずあらゆる人的資源が戦争に協力することが求められるようになった。それまでの女性たちは、家庭の内で母親や妻としての役割を果たすことを期待されたが、戦時体制下では国家のために尽くすよう動員され、積極的に社会進出するようになったのだ。たとえば、銃後の女性は出征兵士の送迎、

生産現場への進出、慰問袋の作成など多様な社会的な活動に参加したが、戦地へ赴いた男性たちの代わりに女性が積極的に社会進出する姿を記録に留めるために、女性作家がペンで様々な媒体に載せられる文章を書くことが必要とされるようになった（矢崎 1940: 245）。とりわけ、1940年代に銃後女性が軍需工場や防空演習など社会のさまざまな場面に進出して活躍するようになると、女性作家の活動も存在感が一気に高まり顕在化した。それは、戦争という特殊な社会状況

* 大阪大学

において国のために健気に奉仕する国民女性に対する認識の変化を、それに歩み寄るような形で「女性」的な視点から描く作品を流布させることによって、庶民の生活により一層、戦争の色を染み込ませるという効果を得ることができるためであった。

日中戦争が泥沼化した1930年代後半の時期から、日本政府は「北進論」から「南進論」に転じて「外南洋」地域に目を向けるようになった。1936年8月4日に開催された五相会議で公布された「国策ノ基準」では、「漸進的平和的手段で」南洋において経済活動を進めることが明示され、「南進論」が初めて国策として唱えられた（矢野 2009: 285-287）。この時期、アメリカが日本向けの軍需資材の供給に制限をかけたため、日本は鉄や石油などを確保することが急務となった。さらに4年後の1940年8月1日、松岡洋右外相は記者会見で「日満支をその一環とする大東亜共栄圏の確立を図る」（矢野 2009: 114）という政府の外交方針を表明した。その後、1941年12月8日に日本は米英に宣戦を布告し、アジア太平洋戦争へと突入した。仏印、シンガポール、フィリピンを含む南洋地域は、欧米諸国の植民地から日本の占領地へと変わった。南洋の地理的範囲は、一般的にフィリピン・蘭印・ボルネオ・マレー・タイ・仏印を含む地域を「外南洋（表南洋）」と呼び、日本が委任統治するミクロネシアを「内南洋（裏南洋）」と称していた。本稿で取り上げる「南洋」とは、1940年代以降に日本が統治した「外南洋」に該当する地域を指している。

1940年に日本が「大東亜共栄圏」の構想を掲げた後、新聞、雑誌などのメディアが当局に協力させられただけでなく、文学者もペンを武器に思想戦と宣伝戦への参加を強いられ、作家たちが続々と徴用されて、日本が新たに占領した南洋へと派遣された。この時期の作家たちは、男女別々に南洋へと派遣されたため、男性作家と女性作家とでは期待された役割なども異なっていたように見受けられる。たとえば、輸送艦の上で太平洋戦争が勃発したというニュースを聞き、砲火を浴びながら敵前上陸した男性徴用作家に対して、一足遅れた出発した女性作家が南洋に着く頃、各地ではすでに日本軍により一年の軍政が施行されており、治安の回復と資源の開発に向けて占領地の建設を進めていたところであった。女性作家の記録によると、彼女たちは太平洋戦争中に日本の新聞メディアを通じて日本に暮らす庶民女性の南進を推奨したほか、仏印やインドネシアといった占領地に赴き兵士たちの慰問や学校の

視察などの活動もしたという。そのほか、彼女たちは日本女性の代表として現地の要人や女性たちと会談する機会を得て、公的領域の晴れ舞台で戦時中の日本人女性が果たす役割や日本女性の「特質」などについて発言した。そうした状況を知るにつけ、「女性を戦車に乗せない」という伝統のある日本の軍部は一体どのような思惑で戦時中に女性作家らを南洋に派遣したのか、この任務を引き受けた女性作家たちの考えはどのようなものだったのかという問いが想起される。

1940年代に南洋に派遣された作家に関する先行研究では、男性作家の南洋での宣伝工作が多様なアプローチから解明されてきた。一方で、男性作家と女性作家が同じ地域に派遣されるという状況下で、戦時中のジェンダー・イデオロギーが文学者たちの南洋経験にどのような影響を与えたかについて踏み込む研究は少ない。例えば、木村一信・神谷忠孝編集の『南方徴用作家』では、1940年代に南洋へ渡った徴用作家のリストを整理し、彼らの徴用の経緯や各地で行われた「文化工作」などの基礎的研究を取りまとめている（木村、神谷編 1996）。また、尹小娟の博士論文「南方徴用文学研究——戦後における南方表象の問題を中心に」では、「陸軍報道班」、「海軍報道班」、「占領地視察」という「徴用形態」の相違によって作家を区分し、六名の作家の戦時中の作品と戦後の改稿に注目し、各作家がどのように南洋の体験を認識していたのかを解明している（尹 2019）。さらに、同じ地域で同じ時期に活動した女性作家の記録を横断的に比較する研究として、鳥木圭太の「女性作家の見た〈南方〉——林芙美子と佐多稲子のスマトラ」が挙げられる。この論文では、林芙美子と佐多稲子が戦時中に発表した紀行文を比較し、二人の作家による他者表象の特徴を明らかにするとともに、共通する「虚偽」の主題を通じて、戦後日本社会における作家の立ち位置を考察している（鳥木 2017）。また、Julz E. Riddle は“The Woman Question during the Japanese Occupation in Kikuko Kawakami’s and Tsuyako Miyake’s Philippine Diaries (1943)”において、1943年にフィリピンの女性知識人と対談した川上喜久子と三宅艶子の日記に焦点を当て、座談会で彼女たちが伝統的な家庭内での女性の役割を強調したのに対して、フィリピン人女性知識人が女性の権利と社会における積極的な役割を擁護したことを分析した（Riddle 2022）。これらからは、先行研究では戦時中に南洋に派遣された男性作家と女性作家の役割分担について横断的に比較する研究がほとんど

なされてこなかったことが課題として浮かび上がる。

本稿は、父権的社会によって付与された「主婦」、「女流作家」、「日本女性」といういくつかのアイデンティティが太平洋戦争中の女性作家に葛藤を生じさせるという、同時期の男性作家の記録には見られない状況を分析し、女性が戦争を語るということの特殊性を明らかにする。特に、1940年代に臨時徴用作家としてフィリピンに派遣された作家のうち、三宅艶子の『比島日記』（東邦社 1944）と川上喜久子の『フィリピン回想』（川上喜久子発行 1984）という二つのテキストを取り上げ、戦時中の女性作家の役割という視点から、彼女たちの南洋体験の特徴を考察する。本稿が敢えて「女性作家」というカテゴリーを採用するのは、(1)「女流作家」というカテゴリーを用いて女性を戦地に送り込もうとした戦時中の軍部の思惑、(2)日本社会に見られた性別役割分業の観念に由来する男性作家と女性作家の集会的な南洋体験の相違、(3)「女性作家」として派遣された個々の女性が意識した自らの役割といった、「女性作家」というカテゴリーの中でそれぞれに重なりつつも異なる問題が存在していることを明確にする必要があるからである。

II 女性作家を戦地に送り込む軍部の思惑

1 内地に向けての宣伝

ここではまず、日本の軍部がどのような考えで女性作家らを南洋に派遣したのかを考察する。女性作家の南洋派遣を引率した当時、陸軍省大本営報道部員だった平櫛孝は、戦後出版した回想録『大本営報道部』において、「婦人の繊細なセンスで戦地を直視してもらおう」と思ったため、女性作家の派遣を決定したと記している。一方で、「女性を戦地まで無事に送るのがこれまた大変な仕事だった。軍用機で北京または上海に送ることも考えたが、「軍用機は兵器だぞ。それに女性をのせるとはなにごとだ」とカタブツの上司から一喝された」（平櫛 2006: 91）と記している。

また、1942年9月に陸軍省報道部が女性作家に配布した「新聞、雑誌記者、女流作家 南方派遣指導要領」では、彼女らを視察旅行という名で徴用する目的は「大東亜戦争一週年記念日ニ方内対内宣伝資料ヲ収集セシム」こと、「戦蹟ノ見学」、「軍司令官、軍参謀、司政長官、司政官、現地要人トノ会見」、「軍政浸透状況ノ視察」にあるとされた（陸軍省報道部 1942）。すなわち、女性作家は本国内向けの「対内宣伝」の担い手と

して、女性に相応しい「争いを好まない」「物柔らか」な素質を発揮し、現地住民の宣撫と軍政に対する喝采とを作品にしたためることで、「大東亜共栄圏」の正当性を補完することを求められていた。

実際のところ、1941年に太平洋戦争が勃発した後、前線で戦う兵士と銃後を守る庶民を一体化するプロセスが強められていく中で、女性作家らは権力側に回って、庶民女性を対象として南洋で得た見聞を発信することで国家の動員政策に加担し、庶民女性の南進を勧めるべく助言していたのである。たとえば、マレーに赴いた小山いと子は「真面目な婦人、家庭主婦たちの手がまたどのやうに求められてゐる事か。これは原住民の女たちを指導するといふほかに、来てゐる日本の男たちのために何よりも急務ではないか」（小山 1942）と呼びかけていた。つまり、小山いと子は最も焦眉の問題は現地の日本人女性が足りないことであり、内地から慰問袋を送るよりも、女性が占領地へ赴き、日本人男性の士気を奮起させることのほうが差し迫って必要とされていると述べているのである。このように、女性作家たちは国家が主導する庶民の南進の代弁者に姿を変え、新聞記事などを通じて、占領地で戦う兵士の後を追ひ南洋へと南進することの重要性を一人一人の銃後女性に意識させたのである。

2 占領地に向けての宣伝

女性作家は日本内地向けの「対内宣伝」の業務を担当されたほかに、南洋において現地人との交流を促進し日本のことを知ってもらうという占領地に向けた宣伝の役割をも求められた。実は、彼女たちの南洋の視察行では軍政が敷かれ始めた占領地で軍部のお膳立てした計画に沿って軍政の進行状況を見聞することが目的とされたため、旅行気分各地を回るようになった。男性作家には宣伝班員として地方宣伝や新聞の作成と印刷などの業務に携わる際に、現地の住民と交流する機会があったのに対して、女性作家らは軍部の指示した公式の座談会に出席し、政府要人や上流階級の女性との交流を行った。その意味では、彼女らも、日本国家の欲望を象徴する記号へと転じ、占領地の人々に日本の文化と日本女性の「婦道」を認識させるのに適当な人材となった。例えば、林芙美子は1943年2月25日にインドネシアの女性との座談会で「銃後の家庭を静かに護りつゞける日本婦人のたゞかふ姿を説明」した後に、「自分の国の習慣にしたがって、つつましい女の愛情で家庭を固めて行くことが最も必要」である

と述べていた（ジャワ新聞社 1943）。三宅艶子と川上喜久子はフィリピンに滞在した際に、フィリピン人との交流を促進し日本のことを知ってもらいたいという理由で、現地の要人と五回の会談を行った。1943年1月5日に報道部主催でフィリピンの先進的な現地女性¹と交流する座談会で、三宅艶子は「フィリピンでは女のの方が威張ってゐるといふことをきいた、それから日本人は女を台所に押し込んでゐると思つてゐる、といふことをきいたけれど、ほんたうにさうでせうか」と尋ねたが、それに対して参加者の一人であったカティグバック夫人は「私にもし、男の子と女の子と二人あつて、その女の子が非常に優れた才能を持つてゐたならば、男の子よりもっと上の学校にまで入れてその才能を延ばすことを決して躊躇しないだらう」と返答した。その後、もう一人の参加者イラガン夫人から発せられた、秩序の下位にいる日本人女性は自身が台所に追いやられることに不満を抱かないのかという質問に対して、三宅艶子は「日本の女は決して嫌々乍ら台所にやられてゐるのではないと、内助の功といふやうな気持ちについて」話し、女性が自ら積極的に家庭内の役割を果たしていることを評価した（川上 1984: 69-73；三宅 2002: 71-81）。座談会に出席した三宅艶子と川上喜久子は公的領域で活躍する日本人女性の象徴となっているが、三宅艶子の回答からはフィリピン女性らが受けとった日本人女性のイメージはむしろ家庭という私的領域内に留まっており、戦時中の日本国家が女性に対して用意した選択肢は限られたものであることを象徴するものであった。

三宅艶子は戦後になってからの語りにおいて、自身のような女性の作家が戦地に派遣された理由は「日本の男性は野蛮だと思い込まれてゐた」ため、「日本の文化度をフィリピン人に示す」、「日本を見直」させる役目は女性が担うべきだと考えられたのだらうと思ひ返している（読売新聞社編 1970: 171-187）。ここからは、軍部が彼女たちを人的資源として利用し、残酷で攻撃的な戦場の風土を、平和を象徴する「女性」の感性で希薄化させようとする企図を抱いていたことが窺われる。男性国民が日本国の領土の拡大と資源の獲得という欲望に駆られて、それらの目標を達成するために野蛮な戦争を起こしたのだとすれば、男性の暴力による鎮圧は現地住民の反抗を起こさせるだけで暴力の

連鎖反応を生むことになる。現地住民の殺戮をも担うことになった男性国民に付与された否定的イメージを補うためには、平和と愛を象徴する「女性」の力を借り、日本国家の代表として占領地の住民を対象に親和と宣伝の活動をしなければならない。従つて、書く女たちは日本国家の占領地を「保護」という欲望を、本物の「日本婦人」として具現化する存在であつたともいえる。このように、南洋の占領地に出た女性作家は「女流作家」という既成の枠組みの中で振る舞い、「日本女性」の貞淑を語りながら、日本国家の占領の正統性と必要性を代弁する言説の中に服従させられたということであり、これは占領という暴力の正当性を擁護することに繋がった。

III 女性作家の占領地南洋の体験

神谷忠孝と木村一信が編集した『南方徴用作家』では、南洋に派遣された男性作家の「文化工作」を「対占領地宣伝、日本語の普及」、「対軍隊宣伝」、「対敵宣伝」の三つに分けている。彼らの徴用期間は「最低五ヶ月から三年に及ぶもの」（木村・神谷編 1996: 8-12）であり、東京都本郷区役所で徴兵検査を受けた後に、軍刀、巻脚絆などの携行を要求された。これらは軍隊の規律のある生活に馴化していくための必需品であつた。南洋に到着すると男性作家らは、戦火を潜り抜けて敵前上陸し、前線報道と現地の治安回復のための「文化工作」に従事した。彼らは輸送艦で軍籍に入る宣誓式を終え（今 1944: 79）、有給の「二流の兵士」として、ペンを武器に敵方の投降を促し国のために命を捧げた兵士たちの勇姿を記録していた。

これに対し、女性作家の出発は男性作家より一年ほど遅れた。彼女たちは軍報道部囑託の「臨時徴用」の形で雑誌、新聞の編集者らとともに南洋に渡った。彼女たちの現地での滞在期間は半年ほどで、無給の身であつた。

南洋への派遣時の女性作家の身分は、陸軍臨時徴用作家、文化大使、雑誌の特派員、国境画定委員のタイピストなど多様であつた。マレー方面に赴いた林芙美子、佐多稲子、水木洋子、小山いと子、美川きよは国際法に反する病院船で千人あまりの民間人とともに出発した（黒田 1952: 57-72）が、ほかの女性作家はほ

1 「女子大学校長ベニテス夫人、作家のカティグバック夫人、哲学博士カルピオ夫人、社会事業家エスコグ夫人、女医アコスタ・シソン夫人、ナショナル・ティーチャーズ専門学校教授イラガン夫人」が出席した（川上 1984: 69-70）。

表1 女性作家の南洋滞在の詳細

	徴用形態	滞在の時期	場所	移動手段	スポンサー
林芙美子	陸軍報道部嘱託	1942年10月31日から 1943年5月5日まで	マレー、ジャワ 島、ボルネオ、 スマトラなど	往路：病院船 復路：飛行機	朝日新聞社
佐多稲子	同上	1942年10月31日から 1943年5月中旬まで	マレー、 スマトラ	往路：病院船 復路：輸送船	毎日新聞社
小山いと子	同上	1942年10月31日から 1944年末まで	スマトラ	往路：病院船 復路：飛行機	読売新聞社
美川きよ	同上	1942年10月31日から (?)まで	ジャワ島	往路：病院船 復路：輸送船	朝日新聞社
水木洋子	同上	1942年10月31日から (?)まで	ビルマ	往路：病院船 復路：不明	産経新聞社(?)
三宅艶子	同上	1942年11月24日から 1943年3月29日まで	フィリピン	往路：輸送船⇒ 台湾で飛行機 ⇒マニラ 復路：飛行機	毎日新聞社
川上喜久子	同上	1942年11月24日から 1943年3月29日まで	フィリピン	往路：輸送船⇒ 台湾で飛行機 ⇒マニラ 復路：飛行機	毎日新聞社
森三千代	文化大使	1942年1月から 4月まで	仏印	往路：飛行機 復路：汽船	国際文化振興会
吉屋信子	特派員	1941年10月21日から 12月19日まで	仏印	往路：飛行機 復路：飛行機	『主婦の友』
木村彩子	国境画定委員のタイピスト	1941年7月19日から 約1年間滞在	仏印	往路：飛行機 復路：輸送船	仏印泰国境画定委員会

※この表は以下の資料を参照してまとめたものである（筆者作成）。

望月 2008；加藤 2004；木村・神谷編 1996；小山 1949；森 1942；吉屋 1942.1, 1942.2；木村 1943

とんど飛行機で移動した。個々の女性作家は文化大使としての身分をあてがわれた森三千代を除き、現地で各新聞社・雑誌の出版社に割り当てられ、それら雇用先の企業に宿泊の場所や現地での移動手段などさまざまな面で便宜を図ってもらい代わりに、原稿を提供することが条件づけられた。このように、彼女たちは何も書かないわけにもいかないという潜在的な心得があったといえるが、見学先の南洋から帰国した後に見たものを文章にまとめるという明確な要求を受けていなかったため、自身の得た素材を取捨選択して書き記す自由をある程度を持っていたと考えられる（読売新聞社編 1970: 182）。南洋での滞在時、女性作家は基本的に日本軍の監視のもとで移動と活動をしたため、彼女たちが接触できる人も非常に限られたものとなった。三宅艶子の『比島日記』では、「女だけで夜歩いてはいけないといふので、二人きりで出掛けたことはなかった」が、川上喜久子とともにカルマタでキャボの教会の祭りに見に行くため、ホテルの知り合いに見つからないよう密かに抜け出したことを記している（三宅 1944: 94）。二人がマニラに着いたばかりの頃

は、「新生比島の歌」を発表する音楽会に出席したり、温泉場に行ったり、市場を回ったりしており、確かに旅行のような暢気な情緒が日記には溢れている。その後、軍報道部は計画を立て、二人に鉄道の開設式や兵器所、捕虜収容所、パターン戦跡、砂糖工場などの場所を訪ねさせた。女性作家は現地での座談会や宣伝工作といった場で国家の「大きな物語」を語る際には、大本営と占領地の軍人の男性たちの間の伝達役となった。そのため、男性たちが定めた基準によって彼女たちの書く内容が左右されるという一面もあったことが読み取れる。1994年出版された『日本のフィリピン占領』の人見潤介にインタビューした記録には、川上喜久子と三宅艶子が視察に訪れた話がある。

私がパナイ島でゲリラ工作をやっているときに、大本営から派遣された川上喜久子さんと阿部艶子さんという女流作家と新聞社の人が、パナイ島に来られたのですが、女流作家のお2人は、実際に一般住民に対してどんな宣伝工作をやっているのか、軍宣伝班の宣伝工作の実情をぜひみたいと言われた。こ

れにはほんまに困って。日本では、「今度の戦争の意義はこうだ」なんて、やいやい言うているところですからね。現地で、「こないしたほうが得だから、日本軍に反抗したらこんなとばっちりがきて損だから、こんなことしないほうがいいよ」、というような幼稚な話ばかり毎日しているのだったら、あの人はなんの宣伝をしていると、むちゃくちゃに言われるだろう。大本営も現地の事情は知らないのだから、きついお叱りをうけることにもなりかねない。それで私は前の晩から、通訳の人に、「明日はいつもと違ってたいへんむずかしいことを言うけれども、君が、民衆に言うことはいつも通り言うてくれ、そして、私の言うことはぜんぜん無視してやってくれたらよい」と言って、私はもっともらしく、その大本営の人にわかるようなことを言う、通訳の人は、いつも言うているように「おまえらこうしたほうが得だよ」と[一同爆笑]、冷や汗流しながら、やりました。(日本のフィリピン占領期に関する史料調査フォーラム編 1994: 505-506)

人見潤介が地方で行った宣伝工作は演説を主体にして、映画、歌唱、伝単を併用して民心を収攬し、ゲリラの投降を促すことを企図したものであった。民衆にとっては演説中の「八紘一字」「大東亜共栄圏」などの言葉はどうしても理解しづらいものであった。平子友長の「三木清と日本のフィリピン占領」では、人見潤介が三宅艶子と川上喜久子を「大本営から派遣された要人(=密告者)として」扱い、彼女たちの前で全力の演出と周到な歓待を行い、気を配ったと指摘している(平子 2008)。以上の資料を合わせて読むと、宣伝の経験を積み重ねた宣伝小隊の成員はわかりやすい言葉で民衆を「教化」することを暗黙の了解として共有していたことがわかる。しかし、このような経験を一時的な参加者である川上喜久子、三宅艶子に知られるのは自分たちの立場を危険にさらすことになり、今まで貫いてきた宣伝の方針を翻される懸念もあったため、彼女らの前ではあえて演出するという対策を取った。宣伝に参加しなかった二人は軍隊の要人が決めたスケジュールに沿って、彼らが見せたいものだけを見せられたことがわかる。

軍関係者が立てた計画の主幹は、主に日本人がいか

に積み日本に輸送していくのか、鉱山の復旧をさせるために先遣隊がいか

に飛び回って仕事に奮闘したのかといったさまざまな産業戦士の苦難を聞かせたため、三宅艶子と川上喜久子の意識の焦点はそこで働いた坑夫ではなく、戦争資源の獲得のための産業戦士の苦勞に集中した(三宅 2002: 115; 川上 1984: 92)。オードドル捕虜収容所に行った際には、彼女たちは所長の部屋で食事を取ったため、実際捕虜が何を食べていたのか、どのような作業を命じられていたのかについては恐らく見せられず、知らされていなかっただろうと思われる。三宅艶子と川上喜久子が現地で見たものは、現地の軍人の見えない手によってフィルターがかけられており、治安が回復した場所だけに案内されたことがわかる。

女性作家の視察旅行には、国家の戦争の正当性と軍政の順調な実行を国民に伝えることが求められていたため、占領地の軍関係者が仲介役として「粉飾」された「平和」像を彼女たちに提示していたことが見受けられる。国家と軍隊から二重の欺瞞を受けていた彼女たちは「国家」(男性)側の暴力を遂行するための便利な存在でしかなかったと言わざるを得ない。なぜなら、現地において女性作家は軍の庇護のもとで活動したために、軍に都合がよいことを書くことが期待され、また軍にとって風向きが悪くなる内容を書いてはならないという二重の制約を受けたからである。こうした側面から見ると、彼女たちは利用される側であっただけでなく、戦争に加担する存在でもあったといえるだろう。このように、戦争協力者としての「加害者」と国家権力に統制される「被支配者」両方の立場に立たされた女性作家の、「歴史的主体」として活動していた主体性に目を向ける時、それと不可分な関係にあったであろう「国家」(男性)側による支配の陰を無視することはできない。

IV 個々の女性作家の自分の役割への意識

1 フィリピンに徴用された作家

作家という職業は発表した作品の芸術性、作家自身に対する認知度などによって文壇での格付けが決定されるのが常である。文壇で一定の地位を獲得するには社会の風潮を捉えて、人目を引く作品を世に送り出す必要がある。個人の内に「女性作家」や「占領者」、「主婦」といった多様なアイデンティティが共存する中で「女性作家」というポジションを前面に押し出すこと

で南洋の視察を承諾するという事は、せっかくの未踏の地へ入るチャンスを掴んだのだから命をかけても創作のモチーフを求めたいという思いが女性たちに存在していたことを示しているといえよう。たとえば、「無名」の作家であった美川きよは『南ノ旅カラ』（文松堂書店 1944）を、阿部艶子は『比島日記』（東邦社 1944）を戦時中に刊行している。要するに、当時「無名」だった女性作家にとっては南洋へ行くのは「名誉」なことであり、名声を上げるチャンスでもあった。個々の女性作家たちの南洋へ赴く動機と立場は様ではなかったが、内地における生活が全面的に規制されていく中で、南洋を訪問することは女性作家にとって書く材料を発見することに繋がるだけでなく、内地の息苦しい生活から解放され、負担が少ない旅行を実現することのできる滅多にない機会であったに違いない。

本節では、フィリピンに徴用された二人の作家のテクスト、三宅艶子の『比島日記』（東邦社 1944）と川上喜久子の『フィリピン回想』（川上喜久子発行 1984）を中心に取り上げ、服装、アイデンティティの葛藤などの面から、フィリピンに派遣された男性作家と女性作家の体験の相違を考察する。

戦時中に行われた作家らのフィリピンへの徴用は主に三回に分けられる。第一次徴用の尾崎士郎、今日出海、石坂洋次郎などは1941年12月24日に甲班の成員としてリンガエン湾から上陸し、1月5日にマニラに入城した。第一次徴用の作家は敵前上陸してからマニラで印刷機など宣伝用の機材を取り揃え、新聞の発行や映画館の開館、地方の宣撫宣伝などの文化工作に従事した。彼らは日本がフィリピンで軍政を敷き始めた頃の初期の宣伝班員として、日本軍による現地での民心収攬と治安回復のための文化工作の礎石を築いた。

第二次徴用の火野葦平や上田広、三木清、沢村勉などは1942年2月に神戸港からフィリピンに向かい、3月4日にマニラに到着した。マニラに到着すると、作家達はすぐに第二次パターン攻略戦に従軍した。5月7日に総攻略戦が終わった後は、報道班員の作家達は文化工作の任務に従事した。具体的には、陣中雑誌『南十字星』の編集、官民連絡所の講習会での講演、収容された捕虜を対象とする教育などの仕事を遂行した。

第三次徴用の里村欣三と今日出海は1944年12月末にフィリピンへ渡ったが、この時には日本軍はレイテ作戦でアメリカ・オーストラリア両軍に完全に敗北しており、帰国するための船便と小型機が全くない地獄

のような状態であった。今日出海は兵士とともにマニラから撤退して山中で五ヶ月放浪生活をした後に、エチヤゲに不時着した飛行機に乗って奇跡的にフィリピンから台湾へ脱出したが、今日出海とブシラク村で別れた里村欣三は1945年2月23日バギオの前線部隊本部で受けた戦傷のために死亡した。

以上のように、第一次、第二次、第三次の徴用を受けた作家達は三木清を除きほとんど血生臭い戦地に足を踏み入れ、砲煙弾雨を浴びた経験をしたといえる（読売新聞社編 1970: 161）。そして、第二次徴用と第三次徴用の間の期間に、川上喜久子と三宅艶子は文藝春秋社の斎藤竜太郎、講談社の萱原宏二、主婦の友社の山下民城、ジャパントイムス写真部の首藤胖、写真協会の鈴木正一らとともに陸軍報道部からの囑託で占領地フィリピンに送られた。

2 女性作家の「洋服」と男性作家の「軍刀」

女性作家が視察旅行という名目で徴用された時期は男性作家より約一年遅れたものの、女性作家と男性作家の間に完全に接点がないというわけではなかった。川上喜久子と三宅艶子は12月10日に「行く雁帰る雁の出逢い場」（川上 1984: 25）であった台北でシンガポールからの帰途にいた寺崎浩、中村地平、中島健蔵、海音寺潮五郎らと出会ったほか、12月19日にマニラで火野葦平に会い、12月20日には三木清と火野葦平の送別会に出席した。川上喜久子の12月10日の日記には男性作家が女性作家の占領地の視察について不平を漏らしたことが記述されている。

どこでの話か、先に派遣されている文人たちが、女流作家が来るときいて、「おれたちがちゃんとやっているところへ、何でのこのこ出張ってくるのか」と大いに憤慨したという、その話しぶりから、中島さんのような人でもそんなふうに思うのか、とひそかに男の狭量さを考えさせられた。自分らの力量に自信があるなら、一カ所二人ずつくらいの方が来たとして、どうせ大した仕事ができるはずもないのだから、自分らの領域を脅かされるようにさわぐ必要もなかろうに……（川上 1984: 25）

川上喜久子と三宅艶子の二人がマニラを訪れたのはフィリピンで軍政が敷かれるようになった一年後であり、現地の秩序がある程度回復しており、治安に対しても過剰な心配はいらなくなった時期であった。二人

の訪問が「出張」ることだったとされるのも、何もない廃墟で治安を回復することに従事していた男性作家の功績をそのまま享受する形で、その戦果だけ手に入れるようなものと男性作家は考えていたためであろう。これに対して川上喜久子は、反語表現を用いて男性作家らに自信さえありさえすれば女性作家を自分の領域に脅威を与えるものであるかのように排斥する必要はないはずだと反発している。彼女が「大した仕事ができるはずもない」と語った女性作家の任務の内実は第一次、第二次徴用された報道班員の前線報道の任務とは異なり、占領地の「治安維持、重要国防資源の獲得と、軍の自活」(筒井 1944: 35)といった軍政の目標が達成されたか否か状況を視察して、その成果を内地に発信することであった。実際、第一次徴用の終了後に帰国して半年ほど後に再び「行政視察」の名目でフィリピンに派遣された石坂洋次郎は戦後になって、「はじめのときに比べれば、たいへん大事にされて、島から島をまわった」と語っている(読売新聞社編 1970: 149)。石坂洋次郎の話からは、視察旅行においては初めの徴用時のように乱暴に扱われることはなかったと窺われるが、その代わりに食費と交通費以外の支給はなく、滞在中の給料が支払われることもなかった。というのも、第一次徴用の男性作家たちは出発からフィリピンの目的地に至るまであらゆる場面で不便を強いられたが、軍部から一定の給料が支給されていた。軍部に正式に雇われた報道班員は階級によって給料や待遇の差があったものの、おしなべて当時の文化人にとっては厚遇であり、それで生活の改善ができると期待する作家もいた(今 1944: 10)。一方、厚遇を受ける代価として前線の視察中に命を落とす危険性があった。他方、無給の川上喜久子は現地で金銭的不自由を忍んだことがあり(川上 1984: 206)、フィリピンから帰国する前に宇都宮直賢大佐に事情を伝えて給料を支給してもらったことを記している(川上 1984: 231)。

第一次徴用作家との間に給料の差があっただけでなく、男性作家と女性作家とでは占領地へ赴く際の身支度にも違いがあった。今日出海の『比島従軍』には、自宅に徴用の白紙が届いた後、1941年11月22日に東京府本郷区役所で身体検査を受けた際、携行可能な物品について記載された注意書を受け取ったことが記されている。それは「夏服(国民服ハ特に可) 夏シャツ一二着、飯盒、水筒、巻脚絆、軍刀」であった(今 1944: 13)。これらは人間の身体を軍隊の規律に適応させる

ことを企図した日常の必需品といえるだろう。特に、軍刀は軍隊に特有の階級制度における兵士としての身分を象徴するものであり、それを常に携行することは被占領者に対して暴力を振るうことを可能にした。彼は、四日後に予定されていた東部防衛司令部での集合および出発に向けて携行品を準備していた際に、文藝春秋社の送別会で菊池寛から「武士の嗜みではないか。切腹する時にだって脇差の一本は要るのだから」と言われ、短刀を譲り受けた(今 1944: 13)。しかし、東部防衛司令部でこの短刀を携帯していた彼は、「軍装に刀がないのは軍夫のよう」だと見なされ、尾崎士郎や石坂洋次郎とともに〇〇〇の久保軍刀店を訪れ、店主に軍刀へ改装するよう依頼した。改装後は外見上、軍刀のように見えるようになったものの、「革鞘の半分も中身もない」状態であったため(今 1944: 73)、今日出海はどのような状況でも「これは腹を切る刀だから」と、人前で無闇に抜き放つことを控えた(櫻本 1993: 73)。一方、石坂洋次郎はマニラへ向かう際に金モールの指揮刀を携行していたため、輸送艦の下士官に吊るすことをやめるよう求められた。その理由は、それが「軍隊ではよっぽど偉いんでなければ、つるさない刀」であったからだ(読売新聞社編 1970: 166)。これらの記述からは、彼らは携行品と軍服によって兵士と同一化されたほか、輸送艦で「軍人勅諭を奉読したり、戦陣訓を大声で斉読したり、体操、防毒面をつけたり外したりする操作」の訓練もさせられたことから(今 1944: 67)、「準兵士」だったといえる。しかし、整然さと迅速さを基準とした軍隊の中で平均年齢が40歳を超えた男性作家から成る宣伝部隊に軍事訓練をさせたとしても、最低限の基準にも達していない「不合格」の兵士に見えるため、「この連中を扱うのは、支那の捕虜を扱うより厄介だ」と文句を言われたこともあるという(読売新聞社編 1970: 165)。このように占領地への徴用という状況下では「準兵士」として訓練された文士達も規律化された生活に内在する暴力性に服従せざるを得なかったが、彼らは終始戦闘力を持たない「二流の兵士」と見なされた。ここには、人間を馴化させる軍隊における文士の不適応性が剥き出しになっているといえよう。

これに対して女性作家のほうはというと、川上喜久子と三宅艶子はもちろん、出発する前に「軍刀」の携行を要求されるようなことはなかったが、三宅艶子は毎日新聞社の人から「あんまりみっともない格好をしては行けない」と言われたという。そのため、彼女は

「当時の東京では着られないような、パーティー用の洋服とか、夏服とかを作って、戦地へ行くなんて感じじゃなく、どちらかといえば、浮き浮きした気持ちで、はなやいでさえいた」というような心持ちで出発したと述べている（読売新聞社編 1970: 175）。日本は1940年2月11日に「婦人人絹製品配給統制規則」を発表し、国民は華美な服装の着用を自制するように求められるようになった。このように、当時、日本が海外侵略の欲望を戦争の形で遂行するには、国民の消費の欲望を消滅させ物資と人心を統合する必要があり、その手段の一つとして、国民女性に均一的で素朴な格好を要求した。しかし、国家を代表し占領地を視察する女性作家には一般女性とは別個の基準を設けて、派手で華美な服装が許されていた。川上喜久子もまた、マニラに着いた後に、マニラ新聞の福本福一から「明日は早速洋服をつくるんですね」と言われたという（川上 1984: 35）。彼女の日記には、マニラの洋服屋へ寄り服を直したりあつらえたりする記録が見られる一方、自分の質朴な格好に対して引け目を感じたことも書かれている（川上 1984: 98-99）。彼女は、ともにマニラへ赴いた三宅艶子の格好に合わせるができなければ、不釣り合いに見えることを嘆いているのである。質朴な格好は日本人男性の面子を潰すことにもつながる上に、占領地における日本国家の権威の発揚にも影響を及ぼすと考えられていた。軍部にとって「女流作家」はあくまでも「女性」の代表でしかなく、彼女たちの才能よりも装いを含む容姿の良し悪しの方を重視していた。だからこそ、占領地で女性が着用した衣服は日本の国力を表現する記号と見なされ、みすばらしい格好はかえって不適切なものとなったのである。このように、占領地に赴いた女性作家は戦時中に国家が女性の私生活に対して課した規制をある程度回避できる立場にあり、その意味では全体主義を利用しながら個人主義を実現したともいえる。その一方で、彼女たちは暴力装置である国家を代表する立場にあることを前提としていたため、衣服を通じて個人の表現を実現することもまた、足枷をはめられながらの自己表現でしかなかった。暴力という手段に乗じてのみ実現可能だった個人の自由は、女性作家が国家による暴力に加担することを意味したほか、彼女たちが男性のセクシュアルなまなごしの対象になることも避けられなかった。たとえば萱原宏一は戦後のインタビューにおいて、マンカヤン鉱山で三宅艶子と川上喜久子の着ていた白い洋服が鉱山の開発に従事していた日本人に

触れられ、「黒く汚れた」ことを回想している（日本のフィリピン占領期に関する史料調査フォーラム編 1994: 353）。男性たちは女性がほとんどいない状況だった中で突如として現れた女性作家を幻想上の日本人女性と見なし、彼女たちが着ている洋服を弄ぶ行為を通して、女性に対する自らの欲望を可視化することさえためらわなかったのである。

占領地へ徴用された男性作家が携行した軍刀と女性作家が着用した洋服の記号性には明らかな相違がある。女性作家は最初から前線に立たされないことを前提として南洋各地へ出発したことがわかる。もちろん、輸送艦に乗る時には女性作家もまた男性作家と同じように魚雷や爆弾の攻撃に晒される危険性があった。しかし、たとえ三宅艶子と川上喜久子が高雄へ行く船で救命胴衣の訓練と夜警の見張りを経験していたとしても、「戦士」としては扱われなかったため、男性作家のように船で軍籍に入る宣誓式に参加させられることはなかった。女性作家の記述には、自身が兵士と文士の身分の間で揺らぐ葛藤や、日本から占領地へやって来た男性たちに女性として乱暴に扱われることに対する不満といったものは見られないが、公的領域に立つ「女性作家」であっても、私的領域である「主婦」として送る日常からは完全に切り離されていなかった様子を見てとることができる。次節では、この様子について考察してみよう。

3 「主婦」として、「作家」としての葛藤

1938年の国家総動員法の公表とともに、日本では性別役割分担である「男は仕事、女は家庭」という構図が、「男は戦場、女は銃後」という状況に変化した。これにより女性たちはそれまで通り家事労働をする「主婦」としての役割を果たすだけでなく、「日本人女性」として、「軍国の妻、母」として、献金、千人針、出征兵の歓送、防火訓練などに至るまで、国民女性として様々な役割を求められるようになったのである。このような活動への参加は、それまで台所に追いやられていた銃後女性たちにとって、「一つの〈女性解放〉であった」とも指摘されている（加納 1995: 84）。そのような中で川上喜久子と三宅艶子が国家を代表してフィリピンに徴用されたことは、当時の文脈から見るとこの上ない「名誉」であった。ただし、公的活動に参加する銃後女性には家庭の役割を全うすることも要求された。フィリピンにいた三宅艶子と川上喜久子の日記にはそうした家庭役割を果たせないことに対して

歯痒い思いを抱いていた様子が見られる。たとえば三宅艶子はマニラで、日本では自由に入手できない食材を見かけた際などに、それを購入したいという欲求に駆られて「主婦」としての役割を想起したことを日記に書いている。

ふと自分が旅先でホテル住ひをしてゐることを忘れてしまふのだ。買って来てすぐ台所に立てるやうな気がしてしまひ、そしてなんだ今トマトケチャップを買つたつて仕様がな、と気がつくとな涙が出る程悲しい。市場で感じる郷愁は、きつと男の人にはわからないだらうと思ふ。(三宅 2002: 25)

1937年に日中戦争が発生した後、日本は綿糸や石炭、鉄鋼などの不足資源をすべて軍需工業に集中させて、民間での不要不急な消費を規制するように統制を開始した。さらに1940年6月以降、日本国内では米不足が続き、同年6月から砂糖、マッチについて切符制の配給の実施に乗り出した。このように内地の食料品が不足する中で、三宅艶子はマニラの品物揃えを見て、公的な立場にあることで家庭の家事に関わることができない自分と、そうした状況に無関心な男性との間に差異が存することを意識していたことがわかる。

一方で川上喜久子は、滞在の期間が急に変更されたことに苛立っていた。

私たちは最初交渉のあった時、往復飛行機で期間は二か月、年内にはらくに帰れるというお話なので承諾したところ、いよいよ出発という時になって突然船に変えられ、しかももはや十二月に入っている。春になれば受験を控えている子供もあり、主婦としてもいろいろ困ることがある。しかも全然無給なので、滞在が長くなれば、持参のお金には制限があることだし、まことに心もとない次第である。(川上 1984: 21)

川上喜久子は、フィリピンで作家として活躍する間にも私的領域における「主婦」としての役割を果たさなければならないというように職業活動と家庭の責任の両立を課されることに苛立ちを感じていた。このように「女性作家」、「主婦」、「母」という役割に内在する期待を同時に背負わされた上、権力側が恣意的に予定を変更することや無給の待遇で長期滞在をしなければならないことが彼女の心身に一層の負担をかけ、不

自由を感じさせたことがわかる。

さらに、彼女の日記には、マニラで文藝春秋社の斎藤竜太郎や講談社の萱原宏一といった日本人男性の相手をしながら、現地の娯楽施設で佳肴と美酒に酔う生活に飽きたことが、以下のように記されている。

もうバーなど回るのはたくさんだ。はかない気持が胸を食い荒らしている。つくづくと仕事がしたい。(川上 1984: 46)

食事の後バーに回る所までお供させられるのは、くたびれている私にはむりであった。来た当座こそマニラを知るためにとがまんしてついて回ったが、高級バーというのか、読んだりして得たイメージとは違う上品で清潔な小店で、私の社会勉強も一二度でもう十分、早く一人になって休みたかった。

家庭を離れた彼らが、主婦であり母であり、多少は話相手もつとまる私たちを、代わる代わる誘ってくれる心情も察しられるけど、相手によってはたまに独りの自由な時間を与えることも、何よりのもてなしであろう。(川上 1984: 199)

戦争の破壊によって頽廃したダンスホールでは依然として男性のために娯楽活動が続けられ、女性が娯楽の対象とされていたことに、川上喜久子は違和感と抵抗感を覚えたのだろう。これについて、中野聡は『東南アジア占領と日本人 帝国・日本の解体』の中で「東南アジア占領をめぐる日本人の「語り・回想」のなかには「酒色に溺れ、ものを買ひあさる」という占領地で遊興にふけていた「醜い日本人」像がよく出ている」と言及している(中野 2012: 199)。さらに、今日出海は「三木清における人間の研究」において、自身が尾崎士郎と晩餐を済ませた後に「悪友と青楼に登ること度々」であったとしているほか、石坂洋次郎にとっては買い物が「憂さ晴らし」だったと書いている(今 1950: 44)。戦時中の占領地における娯楽場は、まるで戦線にとっての後方であるかのように、そこへ戻ってきた戦士の戦力を補給し、占領地にいる男性の感傷性を排除させるために彼らを慰める場所となったと思われる。しかし、川上喜久子のほうは、男性のストレス発散のために、添え物としてそこで一役を買ってもらうなどはなはだなかった。先に見た川上喜久子の文章は、自身が男性間のホモソーシャルを強化するための道具として利用され男性の快楽を満たすためのものになることに抵抗していたことを示している。ただ、

わかるのは、占領地において日本人男性たちは、「主婦であり母」である日本人女性を話し相手として求めているということである。川上喜久子は自身が現地の男性たちにどのように位置付けられているのか、それによって自身と男性たちの間にどのような関係性が展開するのかを察したために、フィリピンの視察旅行の際に男性によって求められる「主婦」「母」役を演じて彼らを引き立てることを拒否したといえるだろう。女性作家たちは、占領地へ徴用され宣伝活動を担うという公的な場においても依然として「銃後女性」としての「主婦」や「母」という役割を割り当てられており、そのことが作家としての活動にとって支障になることに抵抗感を覚えていたのである。

以上のように、三宅艶子と川上喜久子という二人の女性作家の視察日記には、その日の行動を中心にした記録が書き残されているのみならず、その行間に時折「主婦」としての立場、あるいは「主婦」としての立場が見え隠れする。彼女たちの日記からは、たとえ公的領域に出たとしても女性は家庭の母の役割を果たさなければならないという期待を向けられることによる葛藤と心労を抱えていたことがよくわかるだろう。このように、戦時中の日本は兵士になった男性の代わりとして女性の社会進出を推奨する一方で、女性には「家庭の美風を守る」役割があることをも強調し続けていたため、占領地に徴用された女性作家は国民を育て家庭を守る「主婦」と、軍政の浸透を称揚する「女性作家」という二重の相反するような役割を求められたのである。女性作家たちは内地では家事労働によって文筆の時間が削られ、フィリピンでも日本人男性の酒宴に付き添うことで書く時間が削られざるを得ないという状況に置かれていたといえよう。

4 「日本人女性」としての優位性

三宅艶子と川上喜久子の占領地への視察旅行は日本軍の最高統帥機関である大本営による派遣であったため、彼女たちは現地で比較的手厚い歓待を受けた。たとえば、マニラに到着した後、二人は将官以上の人が宿泊するマニラホテルに泊まった。川上喜久子の日記には「フィリピン人の手前女客を二流ホテルに移せるか、と誰か言ったら三宅さんにきいたことがある」と書いている（川上 1984: 142）。「フィリピン人の手前女客を二流ホテルに移せるか」という話にみられるように、このような厚遇には彼女たちが女性であるとの「特殊性」もある程度作用したことは否めない。しかし、

このほかにも二人はフィリピンの至る所で「珍客」として扱われ、注目されている。マンカヤンの鉱山を視察したとき、「日本の女の訪問は正に開闢以来最初のことだそうで、日比人共大そう珍しがったらしく、日本の男性は色が黒いのにな女はどうして色が白いのか、という質問が出たとか、これは後で聞いたことだが、坑道の中にいた人々が、今日は日本婦人が来るというので、一日楽しみにしていたところ、とうとう見られなくてがっかりしたとか、いろいろ面白い話があった」と現地人の好奇心を引いたことは、川上喜久子も触れている（川上 1984: 92）。さらに、同日の夜、現地人の結婚式に出席した折に、酔っていた日本人たちは「これがほんものの日本婦人だ、混血児ではないのだぞ」と彼女たちを「あちらこちら引回した」という（川上 1984: 94）。「混血児」より上位の秩序にいたと思われる二人の一挙一動が現地人の関心をそそっただろうことは明らかである。

三宅艶子と川上喜久子がフィリピンにおいて慇懃な態度で接されたというのは、まさに戦場にいる日本女性の「特殊性」、「希少性」に由来するものであり、彼女たちが男性作家と同様の権力を獲得したことを意味するものでは決してない。たしかに、彼女たちが占領地で享受した珍味や滞在した一流ホテルは一見すると「特権」のようである。しかし、実際にはそれは軍隊におけるジェンダーの不平等性から生じたもので、女性は「男性ほど強い身体を持っていない」、「兵士にはなれない」ことを前提された存在であったがために、占領地を訪れても保護を受けなければならなかったといえる。彼女たちは戦場で砲煙弾雨を浴びながら敵と対峙したわけではないため、その日記には当然、国家のために犠牲を惜しまずといった悲壮で壮烈な心境は見られない。かといって彼女たちは、自身が選ばれて占領地へと徴用されたことに対する不満や不平を漏らしているわけでもない。実のところ、「暗くなって女ばかりで出歩けば街娼と間違えられても仕方ないと教えられた」ため、彼女たちは占領地で自由に外出することができなかった（三宅 2002: 77）。このように、占領地に赴いた女性は「弱い」「侵犯されやすい」存在として認識されていたが、三宅艶子と川上喜久子は訪問先で自身の耳に届く「日本人女性」に対する称揚が戦場における女性の「無能」と「無意味」というイメージを消去させると考えたからこそ、そうした称揚を細かく日記に書こうとしたのだろう。

V 終わりに

国家総動員法が公布された後、日本は〈帝国〉日本が西洋諸国と拮抗する場と見なした南洋に男性作家と女性作家をそれぞれ待遇を区別した上で送り出した。この決定は、男性作家には準兵士として前線で戦争を記録する役割を、女性作家には知的な日本女性として占領地を見学・記録する役割をというように、両者に別の任務を果たさせるものであった。女性作家らは占領地としての南洋において、「女性」の独特な感性を生かして国家が南洋で展開する「偉業」を日本内地で待つ銃後の女性に伝達した。彼女たちには、多くの銃後女性に夫や息子の戦争参加を後押しさせるといった戦争協力が期待されたのである。このようにして、国家の戦争物語は男性作家の占有物ではなくなったばかりか、国家はむしろ衆目を引く女性作家を積極的に利用して、占領地に対する民衆の関心を集めることを企図したものと考えられる。日本内地で「主婦」として「母」として居間や台所に閉じ込められていた女性作家は、占領地への視察旅行という形で国家の代表として公的な舞台に上がることができたが、占領地に到着した彼女たちには父権制と軍国主義を支持しなければならないという運命が待っていた。さらに、軍部の臨時徴用作家として派遣された女性作家は軍部の期待通りの行動と発言をする必要がある一方、同時に被占領者の眼差しに曝されてもいた。また、女性作家が特権的な位置に立つことは必ずしも自由自在に公的領域と私的領域の間を往来することにはならなかった。彼女たちは戦場と日本の文壇における男性と女性の間の非対称な関係と、文壇における女性作家同士の評価の分化という悩ましい事態の双方に直面した。その上で、家庭内での自身の義務を果たすことができないという不安を克服しなければならない立場に置かれたのである。

成田龍一は、戦時中の日本では、ジェンダー間と公私の境界線を曖昧にしていくことによって、「男性／女性、戦場／銃後の安定した、非対称的な関係がゆらぎ、男性性や女性性の自明性が消失し、性別役割分担が従来どおりに遂行し得ない局面があちこちに生じて」いたと指摘している（成田 2002: 18）。本稿で見てきたように、男性原理が支配する戦場に入り込むことは、男性の領分に参与して男性が手に握る権威を揺るがし、男性の占領を観察し監視することにつながるため、女性作家の戦場視察には二元化されたジェン

ダーの構図を強化しつつ、その間に亀裂を入れるという二つの力学の動態の作用が見られたといえるだろう。

参考文献

（日本語文献）

加納 実紀代

1995 『わたちの〈銃後〉』インパクト出版会。

加藤 麻子

2004 「南方徴用作家 林芙美子の足取り——馬來・蘭印行程と、『浮雲』の仏印行程」『武蔵大学人文学会雑誌』36巻3号: 249-270。

木村 彩子

1943 『仏印・泰・印象記』愛読社。

川上 喜久子

1984 『フィリピン回想』川上喜久子発行 製作：西武百貨。

小山 いと子

1942.12.19 「意外だったこと／昭南にて」『読売新聞』読売新聞社。

1949 『椰子真珠』中央公論。

木村 一信・神谷 忠孝編

1996 『南方徴用作家』世界思想社。

黒田 秀俊

1952 『軍政』学風書院。

今 日出海

1944 『比島従軍』創元社。

1950.2 「三木清における人間の研究」『新潮』。

櫻本 富雄

1993 『文化人たちの大東亜戦争 PK 部隊が行く』青木書店。

筒井 千尋

1944 『南方軍政論』日本放送出版協会。

鳥木 圭太

2017 「女性作家の見た〈南方〉——林芙美子と佐多稲子のスマトラ」『論究日本文学』106: 1-16。

中野 聡

2012 『東南アジア占領と日本人 帝国・日本の解体』岩波書店。

成田 龍一

2002 『近代日本の文化史 8 感情・記憶・戦争』岩波書店。

日本のフィリピン占領期に関する史料調査フォーラム編

1994 『日本のフィリピン占領 インタビュー記録』龍溪書舎。

平子 友長

2008 「三木清と日本のフィリピン占領」『遺産としての三木清』同時代社、pp. 304-363。

平櫛 孝

2006 『大本営報道部』光人社。

三宅 艶子

2002 『比島日記』 ゆまに書房。

望月 雅彦

2008 『林芙美子とボルネオ島——南方従軍と『浮雲』をめぐって』 ヤシの実ブック。

森 三千代

1942 『晴れ渡る仏印』 室戸書房。

矢崎 弾

1940.6 「女流作家再論」『政界往来』 政界往来社、pp. 244–249。

矢野 暢

2009 『「南進」の系譜 日本の南洋史観』 千倉書房。

吉屋 信子

1942.1 「南方基地仏印現地報告」『主婦の友』 主婦の友社、pp. 48–57。

1942.2 「仏印泰国防軍記」『主婦の友』 主婦の友社、pp. 96–106。

尹小娟

2019 博士論文『南方徴用文学研究——戦後における南方表象の問題を中心に』 九州大学。

ジャワ新聞社

1943.2.26 「優雅と忍耐を説く 林芙美子さんとインドネシア女性の座談会」『ジャワ新聞』、ジャワ新聞社。

読売新聞社編

1970 『昭和史の天皇11』 読売新聞社。

陸軍省報道部

1942.9.14 「新聞、雑誌記者、女流作家 南方派遣指導要領」 市川市文学プラザ所蔵。

(英語文献)

Julz E. Riddle

2022 The Woman Question during the Japanese Occupation in Kikuko Kawakami's and Tsuyako Miyake's Philippine Diaries (1943), *Philippine Studies: Historical and Ethnographic Viewpoints*: 243–271.

The Roles of Women Writers Dispatched to Southeast Asia

ZHANG Ya*

This paper examines women writers dispatched to Southeast Asian territories during the 1940s, focusing on the roles expected of women writers based on their dispatch period, duration, and activities. In particular, it analyzes two texts by writers conscripted to the Philippines in the 1940s: *Hitō Nikki (Diary of the Philippines)*, Tohōsha, 1944) by Miyake Tsuyako and *Firipin Kaisō (Recollections of the Philippines)*, Self-published, 1984) by Kawakami Kikuko. The study explores how the gendered division of labor in Japanese society at the time influenced these women writers' experiences during a military inspection tour. Through this analysis, the paper highlights how women writers were transformed—either by external pressures or through their own agency—from “women writers” to “Japanese women” and ultimately to “housewives,” aligning with the dominant political and gender power structures in the occupied territories. Furthermore, it reveals that in this process, they were continuously engaged in re-evaluating their roles and reconstructing their personal identities, navigating conflicts, constraints, and resistance. By examining these dynamics, the study aims to elucidate the distinctions between these women writers in narrating war.

Keywords

Southeast Asia, Women Writers, War, the division of labor

* The University of Osaka